安田女子大学紀要　50，271-276（1-6）　2022.

文芸評論

江馬修「本郷村善九郎」考
――日本近代におけるマルクス主義の受容と桎梏についての論考Ⅱ――

吉目木　晴彦
安田女子大学文学部日本文学科

要　旨

小説家であり民俗学者でもあった江馬修は、飛騨の口伝であった本郷村善九郎の英雄譚に史実を対照し、民俗の歴史として形象化した。一方、自らマルクス主義者を標榜した江馬は、民俗小説「本郷村善九郎」、歴史小説「山の民」の執筆を通じて唯物史観の限界と、マルクス・レーニン主義の根本的な欺瞞に直面する。マルクス主義の受容と桎梏を自ら体現した小説家は、だが遂にそれを自覚しなかったことを論評した。

キーワード
江馬修、本郷村善九郎、山の民、歴史小説、プロレタリア文学

江馬修「本郷村善九郎」（一九七三年　北溟社）の性格を端的に顕しているのは最終二十三節、安永大原騒動（安永二、一七七三年）から数十年後、刈草を背負った老爺が孫娘と飛騨山中を歩くエピソードである。

大原騒動とは、幕府の御料所（直轄地）だった飛州で代官大原彦四郎の治世下、十八年間にわたって断続的に起こった大規模農民一揆を指す。その二期目が安永大原騒動で、元禄検地以後に開拓された新田検地の名目により実質全面検地を行い、年貢加増したことで発生した。

新田検地のみとの約束を破られたことに憤激した農民（名主・百姓）は数百人規模で代官所へ参集、代表が請願したが交渉は決裂する。農民側は、江戸の老中や勘定奉行への駕籠訴に踏み切った。二十人の者が飛騨を抜け出すことに成功し、遠路江戸へ潜入する。桜田門で老中松平武元の列に駕籠訴を、他にも奉行所への駆込み訴えを行い、嘆願書は松平武元に渡る。しかし実行者は全員が処罰され、うち五人が死罪、三人が牢死した。

代官大原彦四郎の面子は丸つぶれとなるが、大原は村々の名主を次々に呼び出し、強い圧力を加えた。江戸で駕籠訴などを行った者は、百姓総代などではなく、ただの跳ね上がり者が百姓らの意思と全く関係なく勝手気

ままに行ったと証言捺印させたのである。平百姓たちは激怒した。もっと人数を増やして江戸へ直訴すれば我々の意思が伝わる。百姓寄合の場にいた十七歳の本郷村善九郎は大演説を行い、三千人の農民で江戸城へ直訴する案を訴え、飛騨の農民の意思統一を図った。前代未聞の三千人江戸直訴の噂を耳にした代官は、慌てて隣国五藩（苗木藩・大垣藩・郡上藩・岩村藩・富山藩）に出兵を要請する。すでに百姓の江戸直訴謀議は白川郷を除く飛騨全土での一揆の様相を呈していた。火器なども装備した二千人を超える鎮圧軍に追い詰められた農民は神社に逃げ込むが政府軍は委細かまわず神域へ攻め込み、四十九人の死亡と、三百人以上の捕縛者を出し安永大原騒動は収束する。三千人直訴は実現せず、徒党強訴で飛騨一宮水無神社神主ら四人が磔、本郷村善九郎ら七人が獄門などの仕儀となった。

江馬修「本郷村善九郎」はこの安永大原騒動の民間伝承（フォークロア）に史実を加えて構成した英雄譚（ヒロイックテール）である。著者の代表作「山の民」（一九六六年　理論社）が同じ飛騨高山で明治二年に起こった農民一揆、梅村騒動（一八六九年）を取り上げた小説であることから、「流人」「長次郎の妻」「徳右衛門の家」などと一括して江馬修の歴史小説シリーズ中の一作と見なされる場合が少なくない。

「本郷村善九郎」が「山の民」に先行して発表されたことには留意する必要がある。

一九二九年に特別高等警察に逮捕・拘禁（起訴猶予）された江馬修は、一九三二年に東京から郷里高山へ家族共々移住する。この移住以前、東京在住時代に「山の民」の中心プロットである飛騨高山の明治維新について、すでに文献調査は始められていた。永平和雄の研究[1]によって、作品冒頭の美濃地方へ情勢確認に派遣されていた寺田潤之介の帰着に始まる代官所内の動揺が岡村利平編「飛騨史料維新前後之一」などに拠ることが推認されている。江馬自身は回顧録[2]で「私は自分の郷土の生活についてかなりよく知っているつもりだった。ところが二十数年故郷を離れていた後で、こうして村々を歩いて農民に接触してみると、実際には自分が殆ど何も知っていないことがよく分かった」（P208）と述べており、帰郷の翌年には飛騨考古学会を創設、さらに一九三五年には飛騨考古土俗学会へと改称し、飛騨山村の遺跡調査、発掘、古老への直接取材に専念する。自ら創刊した郷土研究雑誌「ひだびと」に「飛騨の維新（長編創作「雪崩する国」第一編）」の連載を開始する。これが「山の民」の初稿であり以後、四十年以上に亘って六度（もしくはそれ以上）の改作出版を重ね、一九七五年の作者の死によって今日我々が読むことができる「山の民」の姿が定まることになった。

二

梅村騒動には江馬の父親も関わっており、初稿発表開始の六十六年前の出来事である。

古老で体験者もおり、当時の風俗・生活も直接取材することは可能であった。調査・研究と、解釈・分析の深化は改作されるごとに作品に反映されて行く。

江馬修は明治維新当時の山里の人々の意識、感情、価値観、生活を小説の形で再現しようとし、その努力の中で作者の精神は当時の人々と出会い、肉声を聞いていたのである。明治は日本人の意識、思考の大転換期であり、維新前・維新時の記憶も夥しい翻訳由来の造語・概念によって上書きされてしまった。後に文豪の尊称で呼ばれる森鷗外の「阿部一族」「興津弥五右衛門の遺書」などの乃木将軍殉死事件後の作品群は、かかる事態への反発でもあった。拙稿『江馬修「山の民」――日本近代におけるマルクス主義の受容と桎梏についての論考――』[3]ですでに述べたように江馬修

は輸入された唯物史観から照射される〝科学的〟民衆ではなく、実在した民衆に出会いたかった。

「山の民」より二年先行して一九三三年七月に中央公論誌上に初稿が発表された「本郷村善九郎」は、「山の民」とはまた異なる接近法（アプローチ）であったと考えられる。一七七三年に勃発した安永大原騒動は作品発表の一六〇年前の事件であり、もとより体験者は生存していない。安永二年の風俗・生活が、明治二年と変わらないであろうと根拠もなく決めつけるなど、考古学・民俗学研究者江馬修（別名赤木清）[4]にできるはずはなかった。小説「本郷村善九郎」で作者が表出を試みたのは、民間伝承（フォークロア）による英雄譚（ヒロイック・テール）、農民を中心とした民衆の歴史感情、歴史的意識である。

「山の民」によって、作者および読者は現代人ではない明治二年の山間の民衆に出会った。ここが島崎藤村「夜明け前」との大きな違いである。三田村鳶魚が指摘したように「夜明け前」に登場するのは、いずれも維新前後の人々を演じる昭和の意識を持つ現代人だった。それでは映画やテレビドラマの「遠山の金さん」「銭形平次」と構造的に変わるところがない。

明治二年の民衆を甦らせたように安永二年の人々を現前させるのではなく、一六〇年の間、山の民が抱いてきた神話に歴史の息吹を吹き込もうとしたのが「本郷村善九郎」だった。本郷村善九郎は実在した人物で一七七四年（安永三年）十二月五日に、桐生河原の刑場で獄門に処されている。愛嬌のある腕白小僧だった少年は、成長するにつれ明晰な頭脳で飛騨の小天狗と呼ばれ、大原騒動では十七歳の若さで農民のリーダーとなり三千人の江戸強訴を企てる。事破れて打ち首になる際も刑場で自ら首を突き出し、美事な往生際を見せた。娶って間もない妻は十六歳で妊娠していた…。この民間伝承（フォークロア）に、残された史料・物証から事実を補強材料として加え、英雄譚（ヒロイック・テール）の定着を図ったのが「本郷村善九郎」だった。プロレタリア文学の指導理論からすれば英雄主義（ヒロイズム）として排斥されかねない接近法（アプローチ）である。このような接近法（アプローチ）を選ぶ江馬修の資質こそが、マルクス主義者でありながら一方でマルクス・レーニン主義に違和感を抱き続ける根本原因でもあった。

従来、プロレタリア文学・プロレタリア文学者は、文学の側から解析・批判されてきた。曰く作品が定型的、作者の内面がイデオロギーによって抑圧されている、プロパガンダに堕している、自然主義心境小説以来の無思想・無解決のカウンターとしてのみ伸張した等々。しかし、これを日本のマルクス主義史の側から考えると、様相が変わってくるのではないか。

小林多喜二の遺作「党生活者」（一九五三　新潮社）に見られるように当時、日本の知識層、文学青年に強い影響力を持ち、憧憬を抱かせていたのは日本共産党だった。日本共産党は設立当初からコミンテルン（共産主義インターナショナル）の指導下にあり、実態はマルクス主義政党ではなくマルクス・レーニン主義政党だった。マルクス・レーニン主義は武力革命・テロリズムと〝民主集中制〟を特徴とする。民主集中制とは徹底した上意下達体制であり、ごく少数の幹部が情報を独占し意思決定を行う、いわば独裁体制である。テロと暴力で国家体制転覆を図るとなれば、どんな国でも非合法の秘密結社にならざるを得ない。非合法秘密結社が組織を維持し、活動を続けるのに好適なのが民主集中制だった。このような政党が知識層・文学青年を魅きつけたのには日本では明治期の大逆事件とそれに続く弾圧によって社会主義者は堺利彦などわずかしか残っていなかった事情がある。

またコミンテルンはソ連の海外脅威排除が重要な目的でもあり、日本国

内で米騒動を契機に共産党結党の動きがあるのを知ると、野坂参三や無政府主義者の大杉栄などと接触し、結党当初から資金提供者となった。ソ連は日本の国力の源泉を天皇を中核とする国民の結束と見ていたので、国際共産主義運動の理論的指導者ジノヴィエフ、ブハーリンらの指示により、天皇〝制〟打倒と民主集中制が日本共産党の党是となった。ソ連共産党日本支部の色合いが強かったのである。他国の指示によって天皇〝制〟を廃し国家体制転覆を目標に掲げる組織は、非合法にならざるを得ず、そもそも情報の共有体制などできるはずがない。今日二十一世紀の法体系においてさえも唯一死刑だけが刑罰に規定されている内乱罪・外患誘致罪を企てる政党だったのである。

マルクス・レーニン主義政党にとって文学とは何か。

日本共産党は一九二五年の普通選挙制定に対応して労働農民党を乗っ取り、このダミー政党で一九二八年の第十六回衆議院議員総選挙で二十八万票を獲得して、水谷長三郎と山本宣治を当選させた。

また映画、演劇、音楽界、文壇などへ〝党細胞〟を浸透させて行く。党の中心メンバーの宮本顕治自身、高級雑誌の代表格であった「改造」の懸賞で、芥川龍之介を論じた「『敗北』の文学」により、小林秀雄を抑え当選した経歴を持つ。

党員の青野季吉は「階級闘争と芸術運動」「目的意識論」などで、プロレタリア文学の理論的指導者となって行く。その説くところは、文学は社会主義革命実現の手段として未だ目覚めぬ労働者大衆の蒙を啓かなくてはならないという、あたかも坪内逍遥の「小説神髄」が発表される以前の、明治十年代政治小説を思わせるモデルであった。文学はマルクス・レーニン主義の婢、前衛という名の上意下達の最前線、作家は一兵卒、それが日本共産党側から見たプロレタリア文学の正体だった。

党は一方で火焔瓶闘争や山村工作隊などのテロ活動を繰り広げ、資金獲得のために東京市大森区にあった川崎第百銀行大森支店を銃器で襲撃する大森ギャング事件、党の中心にあった宮本顕治・袴田里見らによる党員小畑達夫への私刑殺人事件などを引き起こした。これらの実相も情報独占・上意下達という〝民主集中制〟の中で覆い隠されようとする。

明治末に自然主義文学の末席でデビューして、大正期に「受難者」によって小説家の地位を固めた江馬修は、郷里高山で「最近数年間、私はマルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの著作を手の及ぶかぎり読みあさった。私の頭の中は共産主義の公式と理論でいっぱいになっていた。郷里にもどってまず私の痛切に思ったことは、せっかく苦心して蓄えた知識ではあったが、一おうそうしたものを忘れてしまいたいということであった。むろん、言葉どおり忘れてしまうことは不可能だったが、できるかぎりそうした公式と理論を離れ、それにこだわることなく、何よりも生きた現実の生活を、そのゆたかな、複雑な諸相と共に自分の眼で直接に見たいと念じたのである」(前掲(2) P212)と考えていた。すでにこの時点で、江馬修がマルクス・レーニン主義の秘密結社の論理と相容れる余地は無かった。(問題は、それを江馬修自身が意識化できなかったところにある。)

「山の民」に先行させた「本郷村善九郎」で、江馬修は民間伝承の叙情に緻密な文献調査の成果を加えて、リアリティを与えようとした。人々がかくあって欲しかったと願い続けた本郷村善九郎像を散文の形を採った叙事詩として定着させようとしたのである。

これは事実と証言の積み重ねから特定の主人公なきフィクションを構築し、歴史上実在した「社会」(これ自体が明治の造語である)そのものを再現し、読者に体験させる「山の民」とは真逆の接近法である。

四

本論の冒頭で触れたように、「本郷村善九郎」の最終節は、安永大原騒動からおそらく二〇年位後（十八年間に三度の暴動が起こった大原騒動が終結したのは、大原彦四郎の継嫡大原正純が流刑となった寛政元年一七八九年）の孫娘を連れた老爺の回想場面を描いている。老爺は本郷村善九郎の思い出を語り、孫娘は善九郎の供養塔にアザミの花を手向ける叙情的なシーンで作品を終える。誰も立証も反証もできかねるシーンを持ってきたのは、作者が史実ではなく、人々の記憶の叙事詩化に作品の重心を置いたからである。

以前、筆者は飛騨高山地方を訪れたことがある。こんな所に農耕民が住めたのか、と訝しく感じる峻険な山間の路で、学校帰りの中学生とおぼしい少女に出くわした。筆者が「本郷村善九郎という人物に何か所縁のある所を知らないか」と訪ねると、「善九郎さまなら、遺言書が…」と路を下った先の養蚕家を指さした。

民間伝承（フォークロア）は生きている。単なる史実なら郷土史として授業で教わりもするだろう。現代の少女が、今も「善九郎さま」と呼ぶのはこの地に息づく記憶が人の口を借りて語られようとするからだろう。

江馬修が作品化したかったのは、まさにその記憶だった。

参考文献

（1）永平和雄「江馬修論」おうふう　二〇〇〇年
（2）江馬修「一作家の歩み」理論社　一九五七年

注

（3）吉目木晴彦「江馬修『山の民』――日本近代におけるマルクス主義の需要と桎梏についての論考――」安田女子大学国語国文論集第五〇号　二〇二〇年
（4）江馬修は筆名赤木清として民俗学で業績を残している。

〔二〇二一・九・一六　受理〕

コントリビューター：外村　彰　教授（日本文学科）